

現代日本論基礎講読「論文作成の基礎」

第10講 科学的文体

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] 文章に「科学的」装いを果たさせるための注意事項

1 中間レポートについて

- 印刷面をよくみて、レイアウト、行間、書体などおかしいところがないかよく確認すること
- セクション見出しは、太字やゴシック体にしたりサイズを大きくするなど、目立たせること。特にセクションが階層的になっている場合は、階層のレベルが直感的にわかるように装飾・レイアウトを工夫する
- 素材の説明が不足していることが多い。その素材を読んだことがない読者を意識して書くこと。また、批判のところでは取り上げる内容について、前もって説明しておくようにする。
- ひとつのセクションには複数のパラグラフを盛り込むこと。そのセクションに必要なトピックはなにか、必要な説明が抜けていないか。
- パラグラフの構成に注意すること。トピックが何かわからないパラグラフや、ふたつ以上に分割すべきパラグラフが多い
- 論文の文章では「筆者」は「私」の意味で使われるので、「私が言及している文献の著者」という意味では使わないほうがよい
- 数値を表すときは、原則としてアラビア数字 (1, 2, 3,...) を使う (第5講資料)

点数は20点満点です。内訳と採点基準は、採点表を参照。

8/18 (月) 17:00 までに再提出 (学務情報システム) すれば、5点以内の範囲で加点します。

2 概念と用語

論文の文章では、おなじ概念は常におなじ言葉であらわす (いいかえてはいけない)。また、すこしでもちがいのある概念には、そのつどちがう用語をあてる。参照した文献中でこのルールが破られている場合でも、そのまま引用するのではなく、用語を統一したり、注釈を加えたりして、概念と用語の対応関係をあきらかにしておくこと。

3 事実と意見

3.1 「事実」とは

真／偽の区別が意味を持つ命題であって、個人の主観から独立したもの

例：私は来週富士山に登る。
富士山には月見草が生えている。
つぎの授業は休講である。

事実は、究極的には、真であるか偽であるかのどちらかである。ただし実際には、さまざまな事情のために真偽がわからない場合がある。なお、真である事実を「真実」という。

3.2 「意見」とは

個人の内面にしか存在しないもの（感情・価値・評価・思考・推測・意思・期待など）あるいは真／偽の区別が意味を持たない（判断基準が確立していない）命題

例：私は富士山に登りたい。
私は富士山が好きだ。
富士山には月見草がよく似合う。
富士山は高い山である。

発言や文章が存在する（した）かどうかは、真／偽を判定できるから「事実」である（その発言や文章の中身には関係ない）。

例：太宰治は『富岳百景』で「富士には、月見草がよく似合う」と書いた。

事実について思考／推量／評価しているという現象は「意見」である。

例：今後も高齢化は続くだろう。
つぎの授業は休講だろう。
太宰治は『富岳百景』で「富士には、月見草がよく似合う」と書いているらしい。

以上は教科書での区分である。別の理解の仕方としては、

- 文章が表現するものは、「命題」(proposition) と「モダリティ」(modality) に分かれる
- 客観的な命題が確実性の高いモダリティを伴って述べられている場合を「事実」とよび、それ以外のものを「意見」と呼ぶ

と考えてもよい。

3.3 事実と意見の区別

事実と意見はできるかぎりわかる。セクションまたはパラグラフのレベルでわけておくのがのぞましい (cf. 実証研究の論文の基本形)。最低限、事実を記述する文には意見を混ぜないこと。

〇〇の効果を識別するため、対象者を2群にわけて分析をおこなった。

↓

対象者を2群にわけて分析をおこなった。これは〇〇の効果を識別するためである。

3.4 根拠のある意見

論文の文章においては、できるかぎり确实性の高い客観的な事実に基づいて意見を組み立てることが重要である (教科書 pp. 114-117)。

- さまざまな資料・データにあたって、确实な情報をあつめる
- 事実に基づいて主観的な意見を述べる
- 自分の漠然とした感覚ではなく、具体性を持った事実の裏づけを集めること

4 はっきり言い切る姿勢

事実についても意見についても、表現をぼかさず、はっきりと言い切ること (教科書 第6章)。

- × ……といっても過言ではない。
- × ……ではないかと考えられる。

推量の表現としては、「おそらく……である」や「……の可能性はある」などを使う。そのほか、確からしさの程度を異にするいろいろな表現があるので、よく吟味して使い分けること。推量の確からしさについて、具体的な根拠を示せばなおよい。

5 課題

中間レポート (および自分がこれまでに書いた文章) をみなおして、今日の授業内容に照らして問題がないか点検する。問題になりそうな部分に下線を引いて番号を振り、どういう点で問題があるか、どう書き直せばよいかを書くこと。中間レポートそのものと、課題用紙を提出。

6 宿題

末尾に文献表 (すくなくとも5本) がのっている雑誌論文をひとつとりあげ、そこにのっているすべての文献について同定する。その本や雑誌の当該号がどこの図書館に所蔵されているか、というところまでわかればよい。結果についてつぎのことをまとめて、次回授業時に提出。

- (1) その雑誌論文の書誌情報
- (2) 文献表部分のコピー。簡単に同定できたものに ◎、同定に苦労したが最終的に同定できた文献に ○、同定できなかったものに × をつける
- (3) ○ × に該当するものがある場合は、どのような点で苦労したか、同定できなかった原因はなにかをまとめる

東北大学附属図書館「「レポート力」アップのための情報探索入門」 <http://tul.library.tohoku.ac.jp/modules/supp/?cat_id=3> を参考にするとよい。